



TITLE:

# <巻頭言> 人口減少という時代の課題

AUTHOR(S):

近藤, 耕三

---

CITATION:

近藤, 耕三. <巻頭言> 人口減少という時代の課題. Cue 2002, 9: 1-2

ISSUE DATE:

2002-06

URL:

<https://doi.org/10.14989/57842>

RIGHT:

## 巻頭言

## 人口減少という時代の課題

四国電力会長 近 藤 耕 三



- 新しい国勢調査結果が発表されて日本の人口減少時代が実感され始める一方、アメリカ主導の競争社会への転換を迫られ、大わらわの産業界、そして学会の昨今である。
- ・ ある文明が成熟期に達すると、人口増加が止まり、停滞ないし減少に転ずるという歴史人口学の教えによれば、明治維新以降、ひたすら追ってきた工業文明もいよいよ終局に近づき、ポスト工業文明への移行口を探す時期になったと考えられる。
- ・ 文明の転換が容易なことなのか、危険に満ちたことなのか答えられる経験者はいないが、過去多くの文明が消滅し、廃墟が残る事実を想起すれば、円滑な文明移行の成否は日本社会にとって、決して軽い事象ではないであろう。
- ・ 明治維新を農耕文明社会から工業文明社会への転換点と捉えたと、現今の日本社会にとって最も身近な文明移行期の前体験は江戸時代の後期にある。この時期を見直すことは決して無駄ではないと考えるので、以下 二、三触れてみることにしたい。
- 八代将軍吉宗の人口調査（1721年）約3,100万人から明治6年（1873年）の人口調査3,330万人にいたる150年間の人口変動は±5%の範囲におさまっている。何かが人口の増加を完全に阻止したのである。
- ・ 一方、その間に、工業文明への移行準備は人知れず進行し、明治維新の動乱を比較的少ない犠牲で乗り越え、現在までの約130年間に人口の4倍増を達成した。先物取引を始めた大阪商人に代表される経済社会化の進展、からくり人形に象徴される工業技術の発展等を含め、江戸時代後期における文明移行準備は、結果的に、大成功であったと言えるであろう。
- ・ 歴史人口学の分野において、既に指摘されているところによると、江戸時代後半期において、われわれの祖先は人口の予防的制限に取り組み、工業文明への移行に必要な所得水準つまり貯蓄＝投資が可能な水準を維持した。これが中国に先がけて工業化に成功した要因であったという。現在の晩婚化、非婚化の程度は、人口をほぼ一定に保った江戸期よりはるかに高く、文明の円滑な移行をむしろさまたげる恐れすらあるのではないかと案じられる。
- 文明が成熟すると何らかのストレスが社会の内部に醸成され、それが構成員に働きかけて少子化への道を選ばせると仮定すると、現今のストレスは主として次の2要因から発生していると考えられる。

①土地ベースの農耕文明から工場ベースの工業文明の移行に伴う社会構造の変化

すなわち、長期化、都市化、核家族化、単身世帯の増加、イエ制度の崩壊等々の変化が進み、育児、介護機能が大幅に欠落したが、日本社会は未だこれに代替するシステムを備えたコミュニティづくりに成功していない。

②太陽エネルギー依存の文明から化石エネルギー依存の文明への移行に伴う生活面の変化

すなわち、生物的なフローのエネルギーから非生物的なストックのエネルギーへの転換によって、エネルギー投入量の制約がはずれ、多様な製品と、生産量の急激な増加をもたらすとともに、環境問題の発生、情報の氾濫等々生活面において新しい、未知の事象が次々に発生した。

- このような情勢下において、京都大学に期待される事柄は沢山あるが、エネルギー業界に身をおく者として、省エネルギーにつながる技術－すなわち真空管から半導体への移行により実現されたようなエネルギー効率の高い生産、利用技術－の開発を要望しておきたい。ナノテクやバイオの中に解があるのでは、と期待している。